

【春の地貌季語の解説】

東日本 「桜隠し（さくらかくし）」

桜隠しとは旧暦三月に降る雪をいう・主として新潟県東蒲原郡地域で用いられ、同県魚沼地域では「蛙の目隠し」「雁の目隠し」とも呼ぶとか。桜隠しとは文字通り、丁度桜の咲く頃、花を包んでしまう春の雪である。北国ではそんな時期に予期しない雪に見舞われる。「〇〇隠し」といういい方に、風土が持つ人為を越えた力をそれとなく暗示している。

可惜夜（あたらよ） Ⅱ開けてしまうのが惜しい夜

可惜夜の桜かくしとなりにつけり

齋藤 美規

西日本 「のれそれ」

土佐でアナゴの幼生を「のれそれ」という。「たちくらげ」とも。大阪では「べらた」と呼ぶ。魚獲は二月から五月にかけて、春の肴である。太平洋沿岸で獲れ、北は茨城県沿岸まで産地が広い。「のれそれ」はプリツとした舌触りが好まれ、酢醤油で食べる。甘みもあり、酒の肴にいい。

のれそれや土佐の男の呑みつぶり

山崎 葉

出典：『語りかける季語 ゆるやかな日本』 宮坂静生

『ゆたかなる季語 こまやかな日本』 宮坂静生